『ちくま評論選』解説

16 畏怖する人間

柄谷行人

■凡例　1　①②…は形式段落番号。◆は、設問。　2　▽は、本文の追跡・分析。　3　▼は、読解に関する技法。　4　☆は、記述に関する技法。

（目安）読解問題1　一〇〇字　読解問題2　一二〇字　読解問題3　八〇字

■前提　漱石の『こころ』、思い出そう。『こころ』や『舞姫』を読んでいることが前提になっている評論は多い。『羅生門』や『山月記』もそうだ。

■追跡

①　『こころ』の隠された主題は自殺である。それは、先生の自殺が作品の構成的必然としてでなく、作者の願望のあらわれとしてあるということである。友人を裏切ったという罪感情が、あるいは明治は終ったという終末感が、この作品をおおっている暗さや先生の自殺決行に匹敵しないことは明瞭だからだ。先生は「倫理的人間」である。だが、同時に彼は「内部の人間」（秋山駿）なのである。にもかかわらず、この小説では『門』や『行人』のようなあらわな分裂がなく、それらが重なりあって暗喩的な像を形成している。

私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或いは個人の有つて生まれた性格の相違と云つた方が確かかも知れません。私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己を尽くした積もりです。

▽「先生」（Kじゃないよ！）が自死する理由は何か。Kを裏切ったから死ぬ？（『こころ』）明治が終わったから死ぬ？　別に死ななくていいじゃん！　君はそう思うだろう。たしかにふしぎだね。でも、わかってもらいたいから、いっしょうけんめい、書いた。わかってもらえただろうか――「先生」のこの言葉は、漱石のことばとして読める。

「先生が自死を決意する物語、わかってもらえただろうか、読者諸君？」

「先生」は「内部の人間」なのだ――って？　よくわからない。このあたりが問いかが。次に進もう。

②　「不可思議な私」とはなにか。それは、他者としての私（外側からみた私）と他者として対象化しえない「私」（内側からみた私）を同時に意味している。人間がもし他者としての私にすぎないならば、彼はたとえば赤シャツであり、野だいこであり、要するに単純明快であろう。「自然主義」とは◆**問1**そういう認識にほかならない。

③　たとえば、先生は「金さ君、金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ。」という。しかし、『こころ』はそういう自然主義的認識を書いているのではない。先生自身は金によって動きはしなかったが、女によって動いた。とすれば、「女さ君、女を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ。」といったようなことが書かれているのだろうか。むろんそんなはずがないのだ。

▽「外から見た私」。他者から見た私。他者から見て、あいつはあんな人間だ、と見えるような私。あいつ（おれは）は「赤シャツ（『坊ちゃん』の教頭先生。陰湿で言葉巧み）」のキャラだ。そんなふうに、他者としての私＝外側からみた私、として人間を見る見方。それを「自然主義」的な見方（認識）だと筆者はいう。

ここでは、「自然主義」とは、「人間は金（女＝欲望）によってどんな悪いことでもするものだ」といったように人間を規定する見方を指している。後にも出てくるが、「自然主義」文学は、自分の恥ずかしい欲望をありのままに描くもの、だった。このあたり、文学史の知識が読解を支える。人間って、こんなものさ。こう、わかったように見ようとするのが、自然主義的認識。

漱石は、それとは違う。ここが主旨のキモ。

◆問1「そういう認識」とは？

指示内容の確認。「人間がもし他者としての私にすぎないとするなら」を使おう。構文を変えて。

（解答例）「人間を他者としての私にすぎないと見なしてしまう見方。」

④　先生は誠実であり、誠実たることを苦い経験からほとんど決意のようにつらぬこうとした男である。これを忘れてはならない。にもかかわらず、誠実たらんとするまさにそのことが、彼の誠実さを裏切る。ここにはなにがあるか。われわれは自己（エゴ）をつらぬくことが誰かを犠牲にするほかない人間の関係を見るべきであろうか。そうではないのだ。漱石が見ていたのは、◆**問2**そういう自明の理ではない。それでは、彼がなぜ「こころ」という題名を付したのかはわからないのである。また、そういう理解は漱石をありふれた倫理学者におし下げるものでしかない。たとえば、実際に先生が友人Kにある時期に告白しておけば、さしたる問題は生じなかったであろう。このばあいでも、先生が友人Kを傷つけたことにまちがいはない。ところが、先生はKの自殺が恋愛問題によるかどうかをのちになって疑っている。同じように、先生の自殺も、友人Kを死なしめた罪悪感からではないといえるのである。したがって、『こころ』は人間のエゴイズムとエゴイズムの確執などというテーマとは実は無縁である。漱石が凝視していたのは、依然として「正体の知れないもの」なのであって、さもなければ先生が奥さんに対して冷淡であったこと、奥さんをおいて自殺したことは、またしてもエゴイズムであると非難されねばならないはずだ。

▽まず問2を片付けよう。

◆問2「そういう自明の理」とは？

指示内容の確認。直前の内容。

（解答例）「自己（エゴ）をつらぬくと、誰かを犠牲にするほかなくなってしまうということ。」

「エゴをつらぬくと、必ず誰かを犠牲にしてしまうという、当たり前の理屈。」と足してもいい。

ここで見なければならないのは、むしろ、「自明でない」方だ。それはエゴイズムなどではない。「先生」のエゴが、裏切りがKを犠牲にした。そんな話ではない。こうならないように、誠実に話し合うことが大切だ、なんていう倫理を説く話ではない。漱石の見ているのは、もっと**「正体の知れないもの」**だと筆者は書く。

（④の続き）　Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から座敷へ通る時、即ち例のごとく彼の室を抜けやうとした瞬間でした。（中略）彼は「病気はもう癒いのか、医者へでも行つたのか。」と聞きました。私は其刹那に、彼

の前に手を突いて、詫びたくなつたのです。しかも私の受けた其時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真ん中にでも立つてゐたならば、私は吃度良心の命令に従つて、其場で彼に謝罪したらうと思ひます。然し奥には人がゐます。私の自然はすぐ其所で食ひ留められてしまつたのです。さうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

⑤　これは後悔である。そして、『こころ』の遺書の部分はすべて、なぜあのとき真実をいわなかったのかという**後悔**にみちている。だが、われわれはむしろこういうべきではないか、**真実**というものはつねに、まさにいうべき時より**遅れて**ほぞをかむようなかたちでしかやってこないということを。そして、**◆問3**このずれにはなにか本質的な意味があるということを。

▽問3を片付ける。

◆問3「このずれ」とは？

指示内容の確認。直前の内容をわかりやすく。代入して、意味が通じるように。

（解答例）「真実は、まさにそれをいうべき時よりつねに遅れるという、ずれを伴うかたちでしか語られないということ。」

筆者のいいたいのは、「なぜあのとき真実をいわなかったのか」、いえばよかった、私は後悔した、だから読者の皆さん、いうべきときに真実をいいましょう…そういう話ではない、ということだ。

文学は、「～すべき」をいうためのものではない、というほうがいい。文学が描くのは、「真実を遅れず告白しましょう」ではなく、「真実の告白は必ず遅れる」という現実・認識だ。少なくとも漱石はそう読むべきだ、と筆者はいう。

⑥　**真実**を語るとは告白するということだ。誰でも口にしうる真実などというものは真実ではない。そして、告白するということは、身を裂くような、そして、それを書きつけたなら紙が燃えあがる（E・A・ポー）ような行為である。先生は告白できなかった。なぜなら告白がたえず**一瞬遅れた**からである。というより、われわれはつねに告白において**一瞬遅れるほかない**というべきだ。いかにわれわれが真実であろうとしても、そこにわずかのずれが生じる。このずれがわれわれの自己欺瞞の産物でないとしたら、いったいなにによっているのか。

▽「われわれはつねに告白において一瞬遅れる（ずれる）ほかないというべきだ」。ここでも、そうでしかない、という現実・認識が示される。このずれは、自分をごまかすためのしわざ（自己欺瞞）のせいではない。意識的に、または、無意識的に、ずらしてやろうとしたせいでは、ない。…としたら、どうして、われわれは、遅れてしまうのか。これが問い。

⑦　先生の告白はずるずると遅れていく。だが、たんに遅れるのではない。むしろ告白すべきことが生じたために、お嬢さんへの愛が深化していったという事情がともなっているからだ。これはもはやどうしようもないプロセスである。たとえば、『それから』の代助も告白した。が、その告白は唐突であり機械的である。彼はそれまで自己欺瞞によって無自覚だった「自然」（真実）をさとって、かつて友人に譲った女を奪いかえす。しかし、ここにあるのは単純な図式にすぎない。つまり、自分の本心（自然）と自己欺瞞（人工）の二元的な図式があるにすぎない。

▽「告白すべきことが生じた」→「愛の深化」→「告白が遅れる」…。このダイナミックに絡まり合った事情と対比的に示される例が、「本心」対「自己欺瞞」で、本心が勝った、というような、二元的な図式。

⑧　ところが、『こころ』では『それから』のような木に竹を接いだ唐突さ、図式性がない。こうしようとしながら別なふうにやってしまう人間の、どうすることもできない心の動きが無理なくとらえられているからだ。本心と欺瞞という図式はここでは成立しない。無意識と意識という図式は成りたたぬ。われわれは晩年のフロイトが言語の問題に関心を移したことを考えてみればよい。彼は意識と無意識についての機械的な図式では解くことのできない、一瞬のずれを解明しようとしたのである。「超自我」なるものがわれわれの「自然」を抑圧している、などということは冗談にもならない。告白の不可能性を探っていけば、われわれは欺瞞や自尊心のかわりに、この世界で人間が存在するあり方そのものに眼を転ずるほかないのだ。いいかえれば、われわれがこの世界で存在するありようそのものがわれわれを真実（自然）から疎隔（ずれ）させているのではないのか。「不可思議な私」とは、そのように存在するほかない人間の不可思議さである。

▽フロイトの例はここだけではわかりにくい。わからなくてもいい。筆者が、本心と欺瞞、無意識と意識という図式を否定していることだけをおさえる。A「欺瞞や自尊心」のせいで本心が抑圧されている、といった図式が否定されている。

なぜ告白できないのか？　Aのせいではないとしたら？

筆者の示すのは、**B「この世界で人間が存在するあり方そのもの」「われわれがこの世界で存在するありようそのもの」**。これは、④段落にあった**「正体の知れないもの」**と同じ何かを指している。そして、ここでの**「人間の不可思議さ」**もまた同じ。

⑨　**◆【読解問題1】**漱石は告白をいささかも信じてはいなかった。だが、たとえば、島崎藤村の『破戒』では、告白が単純に信じられている。瀬川丑松が告白できなかったのは、自尊心や虚栄心のためであって、それを棄てれば告白とは事実を述べることにすぎなかったのである。『罪と罰』を下敷きにしたといわれるこの作品には、まったくドストエフスキー的問題は存在しない。藤村以後、日本の小説は自然主義的な「真実」をいかに自尊心をすててリアルに「告白」するかという一点に関心がそそがれる。彼らからみれば、漱石などは「余裕派」にすぎず嘘しか書いていないことになる。だが、告白しうる真実などはとるにたらない。漱石が告白しなければならないがゆえに告白しえない何ものかを所有していたことは明らかである。それが何であるか、私は知らないし、知りたいとも思わない。ネタが割れたとしても、たかだか自然主義的な「真実」にすぎまい。だが、漱石が、あるいはわれわれがかかえている真実とはそんな単純なものではないはずだ。『こころ』を読んだ者にはすでに明瞭であろう。漱石の眼が人間の心理をあばいて得意になる類いのものではなく、**◆問4**われわれの生存を不可避的に強いている何ものかに向けられていることが。そして、こういうときに、漱石は人間の孤独というものを凝視するほかなかったのである。

▽告白を信じないとはどういうことか。告白とは自尊心を捨てて事実を述べること。漱石は、自尊心を捨てて、何か人には言えないような秘密のようなことを述べること自体を、

別に大事なこととは考えていなかった、ということだろう。

自然主義の作家は違う。『破戒』は被差別部落の出身であることを「告白」する話だが、そこでは「真実」をいかに自尊心をすててリアルに「告白」するか、が作品の意義と考えられている。

漱石にも、何らかの過去の秘密があった。江藤淳という文芸評論家の説によると、その一つに、彼と彼の兄嫁との恋があるという。これはむろん道ならぬ恋であり、しかも、その兄嫁は早くに死ぬ。しかし、その「事実」を「告白」するような形で、漱石は小説を書いたのではない。筆者はそう言っている。筆者が、自然主義的な「真実」と呼ぶのは、週刊誌的なネタにすぎない。

では、漱石は何を見ていたか。

この文章では、「漱石が見る・漱石の目・凝視」といった表現が多用されている。

漱石は何を見たのか。ここまでの記述をていねいにたどると、それらは次のように表現を少しずつ変えている。

「正体の知れないもの」「人間の不可思議さ」→「この世界で人間が存在するあり方そのもの」「われわれがこの世界で存在するありようそのもの」。そしてここでの「われわれの生存を不可避的に強いている何ものか」→「人間の孤独」。

◆問４「われわれの生存を不可避的に強いている何ものか」とは？

書かれていることでしか答えようはないから、今挙げた表現で答えることになる。

（解答例１）「この世界で人間が存在するとき、そうでしかないあり方そのもの。」

（解答例２）「この世界で人間が存在するとき、そうでしかないあり方そのものだが、人間にとっては、どこから来るのか正体の知れないもの。」

（解答例３）「この世界で人間が存在するとき、そうでしかないあり方そのものであり、それを知るとき、人間の孤独を悟らざるを得ないような何か。」

だんだん詳しくしてみた。とりあえず、１でもよい。なかなか実感できないだろうが、逆に、このことばを念頭に置いて、たとえば『こころ』を読み返したら、「ははん」と思い当たることかあるに違いない。

（⑨の続き）　私は妻から何の為に勉強するのかといふ質問を度々受けました。私はただ苦笑してゐました。然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間すら、自分を理解してゐないのかと思ふと、悲しかつたのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思ふと益々悲しかつたのです。私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中に**たつた一人**住んでゐるやうな気のした事も能くありました。

同時に私はＫの死因を繰り返し繰り返し考へたのです。其当座は頭がただ恋の一字で支配されてゐた所為でもありませうが、私の観察は寧ろ簡単でしかも直線的でした。Ｋは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまつたのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向かつて見ると、さう容易くは解決が着かないやうに思はれて来ました。現実と理想の衝突、――それでもまだ不充分でした。私は仕舞にＫが私のやうに**たつた一人**で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もＫの歩いた路を、Ｋと同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横過り始めたからです。

⑩　先生は「明治の人間」として死ぬのではない。「慄（おのの）とする」ような荒涼たる風景のなかで死ぬのだ。むろん、彼がそういう風景を見てしまったのは「明治の人間」だったからである。しかし漱石はいささかも自分が「古い人間」だとはいってはいないので、ただ「新しい人間」たちに、彼が見なければならなかったものを、そして白樺派の青年たちが見ないでいるものを、伝えようとしているのだ。**◆【読解問題２】漱石の倫理観は歴史的なものだが、彼の人間存在に対する洞察はわれわれにとって切実である。**

▽「慄（ぞつ）とする」ような荒涼たる風景」の中で死ぬとは、「何処からも切り離されて世の中にたつた一人住んでゐるやうな気持ち」で死ぬことである。「明治」が終わるとき、「明治の人間」は、「自分が生きてきた明治といふ時代から切り離され、世の中にたつた一人住んでゐるやうな気持ち」を抱くだろう。しかし、それは、たんに自分が「古く」なったからではない。「自分が見なければならなかった」「世の中にたつた一人住んでゐるやうな気持ち」は、今、若い君たちは見ていないかもしれないが、どんな人間にもある、人間がこの世で存在する限りそうでなくてはならない、逃れることのできない寂しい風景そのものなのだ。それは、恋、が成就したら消えてしまうようなものではない。

⑪　**◆問５**『こころ』は人間の「心」を描いたが、心理小説ではない。それは、ドストエフスキーの小説が無限に人間の心理を剔抉（てっけつ）しながら心理小説でないのと同じである。人間の心理、自意識の奇怪な動きは、深層心理学その他によっていまやわれわれには見えすいたものとなっている。だが、『こころ』の先生の「心」は見えすいたものであろうか。見えすいたものが今日のわれわれを引きつけるはずがないのだ。おそらく、漱石は人間の心理が見えすぎて困る自意識の持ち主だったが、そのゆえに見えない何ものかに畏怖する人間だったのである。何が起るかわからぬ、漱石はしばしばそう書いている。漱石が見ているのは、**心理や意識をこえた現実**である。科学的に対象化しうる「現実」ではない。対象として知りうる人間の「心理」ではなく、**人間が関係づけられ相互性として存在するとき見出だす「心理をこえたもの」**を彼は見ているのだ。

▽先に「こうしようとしながら別なふうにやってしまう人間の、どうすることもできない心の動き」とあった。『こころ』を読んだものには実感できるだろう。「人間が関係づけられ相互性として存在するとき見出だす「心理をこえたもの」」というここの記述は、たとえば、「私」がいて、「K」がいて、「お嬢さん」がいて、「過去」があり、「言葉」があり、「ずれ」があり、関係が事態を生み、事態が関係を変化させ、別の事態を招き、過去から未来へ続く運命の筋のただ中に感じられるもののことをいっている。それは、たとえば、次の描写が伝える感触の中に、息づくものである。

「もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をものすごく照らしました。（『こころ』）」

これは、たとえば、衝撃といった心理的な言葉で捉えられるようなものとは異なっている。

◆問５「『こころ』は人間の「心」を描いたが、心理小説ではない」とは？

人間の心理は、見え透いている。漱石は人間の心理が見えすぎている。漱石はその見え透いた心理を描いたのではない。心理小説は、心理を描く。心理小説を書くものは、心理は見えにくく、それを小説の形で描くことに興味や意味を感じるからである。漱石は、漱石にとって見えないものを描こうとした。何が起るかわからぬ、という現実、自分がその中にあってそれに巻き込まれつつ生きている現実。「対象化」とは、自分から切り離して、客体として、観察したり分析したりすることだが（つまり科学のやり方だが、そして心理

小説はその科学的な方法をとるのだが）、漱石は、現実の〈内部〉で、「他者として対象化しえない「私」（内側からみた私）（②段落）」として現実を見ようとする。

☆切り身にして、言い換えていくことで、解答の形ができていくだろう。

『『こころ』は／人間の「心」を描いたが、／心理小説ではない」

↓「『こころ』は／人間の「心」を描いたが、／心理小説のように●●を描いたのではなく、／○○を描いたということ。」

（解答例）**「『こころ』は、人間の心の動きを描いているが、心理小説のように心理を対象として**（見えるものとして）**描くことを目指しているのではなく、心理の描写を通して、心理や意識を超えた、見えない**（対象化しえない）**現実を描こうとしたものであるということ。」**

⑫　人間は死と太陽をみつめていられない、とラ・ロシュフコーは書いた。あるいは、人間は虚栄心のためなら何でもする、と書いた。あらゆる心理（小説）家が依拠しているのはこの種の素朴な前提にすぎない。だが、人間はある現実的な契機に強いられたときには、太陽をみつめることもありうるのだ。ありうるということの恐しさを、漱石は「慄とする」ような孤独において思い知ったのだった。「精神界も全く同じ事だ。何時どう変はるか分らない。さうして其変はる所を己は見たのだ」（『明暗』）。◆**【読解問題３】漱石が何を見てしまったのか、詮索するには及ばない。**だが、彼が生涯この驚きにとらわれた男であったことだけは記憶に値するであろう。

■**読解問題**

1「漱石は告白をいささかも信じてはいなかった」のはなぜか。

注目するのは⑨段落。**☆不要な部分を削り、必要な部分をリライト**していく。

A　告白とは、本当のことを、自尊心をすててリアルに口にすること。だが、告白しうる事実などはとるにたらない、と漱石は考えていた。

B　漱石がかかえている真実は、告白すれば済むというような単純なものではなかった。漱石がかかえていたのは、告白しなければならないがゆえに告白しえない何ものかであった。

答え、はここにあるのだから、枝葉を刈り取って、組み立て直せば解答になる。問いと答えがきちんと対応するように構文を整えて。

【解答例】「漱石がかかえている真実は、告白すれば済む単純なものではなく、告白しなければならないからこそ告白できないという複雑なものであったので、自尊心を捨てれば告白できる事実などはとるにたらない、と考えていたから。」

B　漱石の真実は複雑だったので、A　単純な告白など信じなかった――という順番に入れ替えてみた。

2「漱石の倫理観は歴史的なものだが、彼の人間存在に対する洞察はわれわれにとって切実である」とはどのようなことか。

ぴんと来にくいかもしれない。そういうときは、まず、**▼形式的に内容を整理する**と見えてくることがある。ぴんと来なくても、とりあえず、形として、そう書いてある、という組み立て・論理をたどり直すのだ。

漱石の倫理観（A）＝歴史的なもの

漱石の人間存在に対する洞察（B）＝（現代を生きる）われわれにとって切実。

倫理観とは、何を正しいとするかという考え。それは歴史的だ、というのは、何が正しいか、ということは、その時代に規定される、という意味である。明治には明治の倫理がある。それは平成のものとは違う。古代のものとも違う。明治の人にとって罪悪感を伴うことが、今ではなんともない、という例はいくらでもある。

漱石は自分が生きた「明治の人間」としての倫理観を持っていただろう。しかし、大事なのは、明治の人間としての倫理観（A）を持っていたのほうではなく、持っていたから、「ぞっとする風景を見てしまった」（B）のほうなのだ。これがこの文章の主旨だった。

洞察とは、真実を一気に見てしまうことだ。

漱石が見ようとしていた「心理や意識をこえた見えない（対象化しえない）現実」（B）は、時代を超えた人間にとっての真実である。時代を超えているから、現代を生きるわれわれにとっても切実に感じられる可能性を持つのである。

【解答例】「漱石が明治の人間として持っていた倫理観は時代に規定されたものに過ぎないが、漱石が見てしまい、また、描こうとした、心理や意識を超えた人間存在の現実は、時代を超えて、現代を生きるわれわれにとっても切実に感じられるものだということ。」

3「漱石が何を見てしまったのか、詮索するには及ばない」のは、なぜか。

「人間はある現実的な契機に強いられたときには、太陽をみつめることもありうる」とは、「人間は、普通ではあり得ないような、身を滅ぼすようなことを自ら招こうとする」という意味と思われる。それが「ありうるということの恐しさを、漱石は思い知ったのだ」と書き手は推定する。彼の作品の中に（『こころ』の中にも）繰り返し、「あり得ないことが起きる驚き」が書き込まれているからだ。

漱石が、彼の実際の人生において、何を体験したのかについては、詮索するには及ばないが、彼が生涯この驚きにとらわれた男であったことは記憶せよ、と書き手はいう。ここで対立するのは、A「何を見たかということ」とB「驚きにとらわれ続けること」である。

問いに対する端的な答えは、**「AよりBが大事だから」**ということになる。なぜ、そうなのか？　ここで問題にしているのは、漱石の作品を読む価値について、だ。ここで、この問いが最後の設問であることをふまえて、本文の最初の問いかけに戻るならば、「漱石は対象化できるもの（心理や意識）を描こうとしたのではなく、対象化できない正体の知れないものを内側から描こうとした」という指摘が思い起こされる。

「漱石にはこんな体験があり、それが原因でこうなった」というような「対象化（外側から何かを説明するようなやり方）」は、人に「そうだったのか！」といったわかりやすい納得を与えるかもしれない。自然主義文学が、暴露的なネタで小説をこしらえたのもそういうやり方である。しかし、例えば『こころ』を読んでやってくる感想は、「でもKは失恋しただけで死んだのか？」といった、驚きとさらなる疑問である。

漱石の作品を読む価値は、漱石の驚きをともに経験するところにあり、その原因を知ることにはない。また、その原因といったものを、浅薄に示すことなどできないことをこそ、作品はわたしたちに教える。

【解答例】「漱石は心理や意識を対象化して描こうとしたのではなく、その作品の価値は、対象化できない人間存在の現実やその驚きを内側から描こうとしたところにあるから。」

〈畏怖すること〉がなぜわれわれにとって切実なのか？　それは現代とは、畏怖を失った時代だからである。正しくいうなら、畏怖とは無縁に生きられていると錯覚している時代だからである。われわれは世界を人間を馬鹿にしているのかもしれない。すべてが〈想定内〉だと嘯いているだけなのかもしれない。